

[議案 1]

2022 年度 事業報告

目次

2022 年度 事業報告 (概要)	3
0.1. 2022 年度活動について	3
0.2. 役員、執行体制および会議等	3
0.2.1. 法人第 4 期(2022～23)役員	3
0.2.2. 執行組織体制	3
0.2.3. 会議体	4
0.3. 会員状況	5
0.4. 主要な活動	7
0.4.1. 会長直轄組織	7
0.4.2. 運営統括部	8
0.4.3. 組織統括部	8
0.4.4. 技術統括部	8
0.4.5. 中長期方針/計画の検討	9
2022 年度 事業報告 (詳細)	10
1. 品質工学の研究と調査、およびその奨励、助成	10
1.1. 田口の考え方の収集・整理	10
1.2. 研究会との連携強化	11
1.3. 品質工学の体系化	11
1.4. 品質工学新領域開拓	11
1.5. 品質工学手法研究	12
2. 品質工学の普及、およびその奨励、助成	13
2.1. 資格制度の制定	13
2.2. 品質工学教育特別講座の開催	13
2.3. 解析支援ツールの提供	13
2.4. 広報活動の強化	13
2.5. 品質工学の国際化	14
3. 品質工学の研究、普及および当法人への多大な貢献に対する表彰	15
3.1. 論文に対する表彰	15
3.1.1. 精密測定技術振興財団 品質工学賞 論文賞	15

3.1.2.	品質工学会 ASI 賞	15
3.2.	品質工学会 日本規格協会 理事長賞	15
3.3.	学生賞	16
3.4.	発表に対する表彰	16
3.4.1.	精密測定技術振興財団 品質工学賞 発表賞	16
3.4.2.	品質工学研究発表大会 会長賞	17
3.4.3.	品質工学研究発表大会 実行委員長賞	17
3.5.	田口賞	17
3.6.	貢献賞	17
3.7.	表彰体系および基準の見直し	17
4.	学会誌その他の刊行物の発行	18
4.1.	学会誌「品質工学」の発行、編集改善と投稿数の増加施策	18
4.2.	同誌掲載論文のレビュー	19
5.	研究発表大会、研究集会等の開催	20
5.1.	品質工学研究発表大会	20
5.2.	品質工学技術戦略発表大会	20
5.3.	企業交流会 ⇒ 特別企画シンポジウム	20
5.5.	学校交流会	21
6.	品質工学情報の収集、提供	22
6.1.	論文電子公開(J-Stage)	22
6.2.	事例データベースの作成・公開	22
6.3.	品質工学関連図書および文献の収集・・・田口玄一博士の著書を主に	22
7.	内外の関係団体との連絡および提携	23
7.1.	日本規格協会	23
7.2.	日本品質管理学会	23
7.3.	日本科学技術連盟	23
7.4.	産業技術総合研究所との技術交流	23
7.5.	JAXA	23
7.6.	農林水産省	23
7.7.	JAQ 設立準備委員会	23
7.8.	横幹連合	23
8.	その他、この法人の目的を達成するために必要な事業	24
8.1.	会議体運営	24
8.2.	予算管理(全般、会費徴収管理など)	24
8.3.	規程整備	24
8.4.	バックナンバー頒布方法の改定	24
8.5.	会員管理システムおよび事務局の労務形態の変更	24

2022 年度 事業報告（概要）

0.1. 2022 年度活動について

2022 年度は、学会創立 30 周年にあたり、昨年度に予定を完了しました Vision30 活動の結果を受け、次の 5 年からさらに将来に向けて活動についての方向性をさだめるため、2022 年度研究発表大会での椿会長講演で示された以下のポイント、

- ◆ 「田口玄一が構想した品質工学的視点」と、「原理を欠いた社会課題解決が不完全なものになる可能性」を**社会に対してアピールすること**。
- ◆ 品質工学会の社会責任として「現状提唱している方法が有効な社会課題すなわち品質工学の基本原理の適用範囲」と、「品質工学が用いている原理の使用上の注意（副作用）」を社会に発信可能とする**学理の知を充実させること**。
- ◆ 品質工学会が主唱する原理が国際社会に理解され、次の 10 年間に先端理工学分野、社会科学分野との協働の中で実装されるような**知の統合活動を産官学で企図すること**。

これらを念頭に、品質工学の有する「魅力的品質」を社会に認識させ、品質工学の「当たり前品質」を日本の理工学教育に定着させ、次世代品質工学の学理と適用の知を発展させることを目指し、中長期計画を議論しつつ活動してまいりました。

0.2. 役員、執行体制および会議等

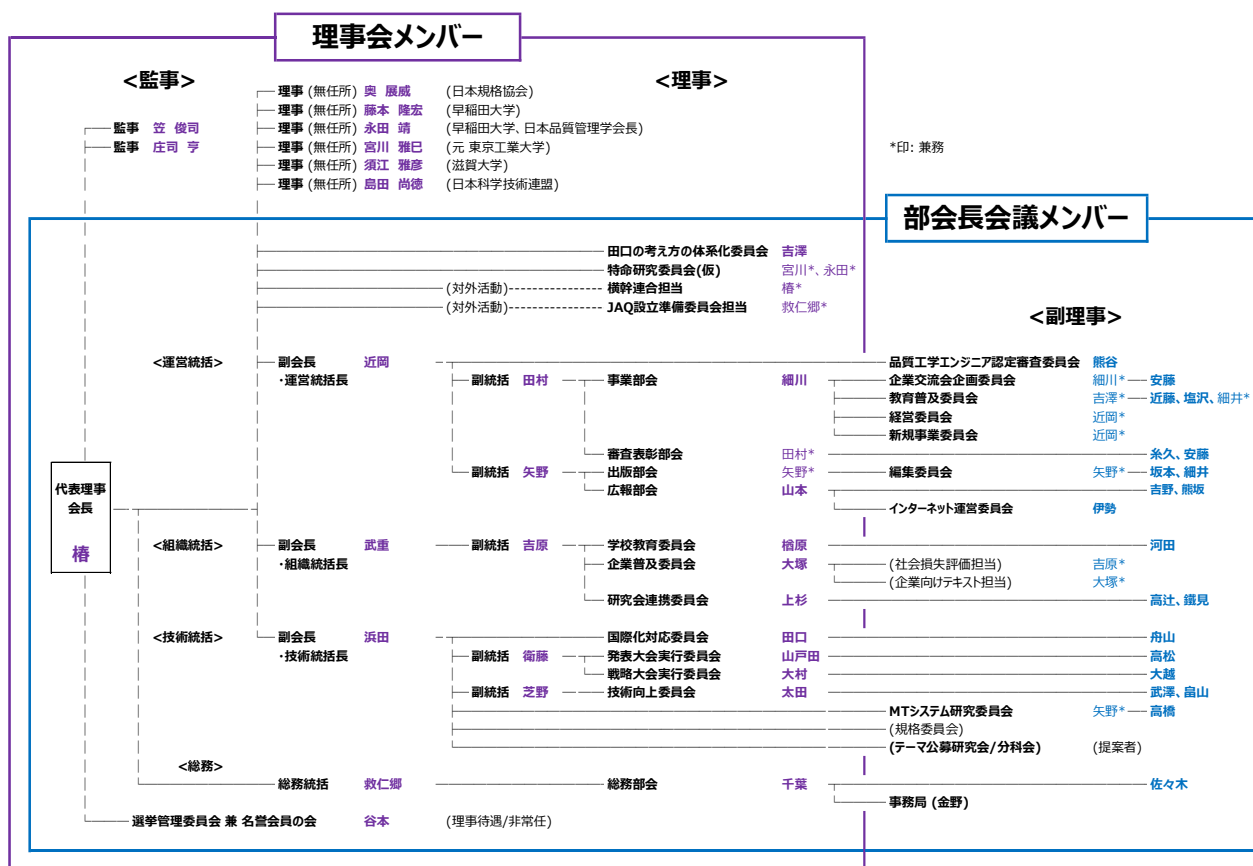
0.2.1. 法人第 4 期(2022~23)役員

- 理事** 上杉 一夫、衛藤 洋仁、太田 勝之、大塚 宏明、大村 欽也、奥 展威、救仁郷 誠、芝野 広志、島田 尚徳、須江 雅彦、田口 伸、武重 伸秀、田村 希志臣、近岡 淳、千葉 亨、椿 広計、永田 靖、檜原 弘之、浜田 和孝、藤本 隆宏、細川 哲夫、宮川 雅巳、矢野 耕也、山戸田 武史、山本 桂一郎、吉澤 正孝、吉原 均 … 以上 計 27 名
- 副理事** 安藤 力、安藤 欣隆、伊勢 大成、糸久 正人、大越 問、河田 直樹、熊谷 保昭、熊坂 治、近藤 芳昭、坂本 雅基、佐々木 康夫、塩沢 潤一、高辻 英之、高橋 和仁、高松 喜久雄、武澤 泰則、鐵見 太郎、畠山 鎮、舟山 博人、細井 光夫、吉野 莊平 … 以上 計 21 名
- 監事** 笠 俊司、庄司 亨 … 以上 計 2 名 (各々五十音順)

0.2.2. 執行組織体制

2022年度 一般社団法人 品質工学会 執行組織体制

2022年 7月31日



0.2.3. 会議体

- 1) **定時社員総会:** 2022 年 6 月 24 日(金)、品質工学研究発表大会の第 2 日目の開始前に、社員総数 131 名中 118 名(リモート 100、委任状 18) の出席を得て開催しました。
- 2) **理事会:** 定款第 31～36 条に規定される「この法人の業務執行の決定機関」として、下記の期日に開催しました。
[定例]: 2022/6/8(水)、9/14(水)、12/15(木)、2023/3/9(木)、計 4 回
[臨時]: 6/24(金)、2022 年度の代表理事の選任および大会発表賞受賞案の決議の為。
- 3) **部会長会議:** 学会運営の執行に関わる検討・論議、情報共有、調整および進捗管理のための会議体として、毎月開催しました。(原則第 2 水曜日)
[定例]: 2022/4/13(水)、5/11(水)、6/8(水)、7/13(水)、8/10(水)、9/14(水)、10/12(水)、11/9(水)、12/15(木)、2023/1/11(水)、2/8(水)、3/9(木)、計 12 回
- 4) **中長期活動方針・計画検討会:** Vision30 活動の結果を受け、次の 5 年、さらに将来に向け、当学会の目指すもの、そのために必要な実施項目について、毎月の部会長会議の終了後に役員有志で、また理事会の議題として、さらに、別途に時間を設け「会長+3 副会長」での会議を数回開催し、方針の検討と 2023 年度実施項目について詰めてきました。
これらの活動からの現時点での結論については、2023 年度事業計画を参照ください。

0.3. 会員状況

1) 個人会員(正会員・学生会員・名誉会員)

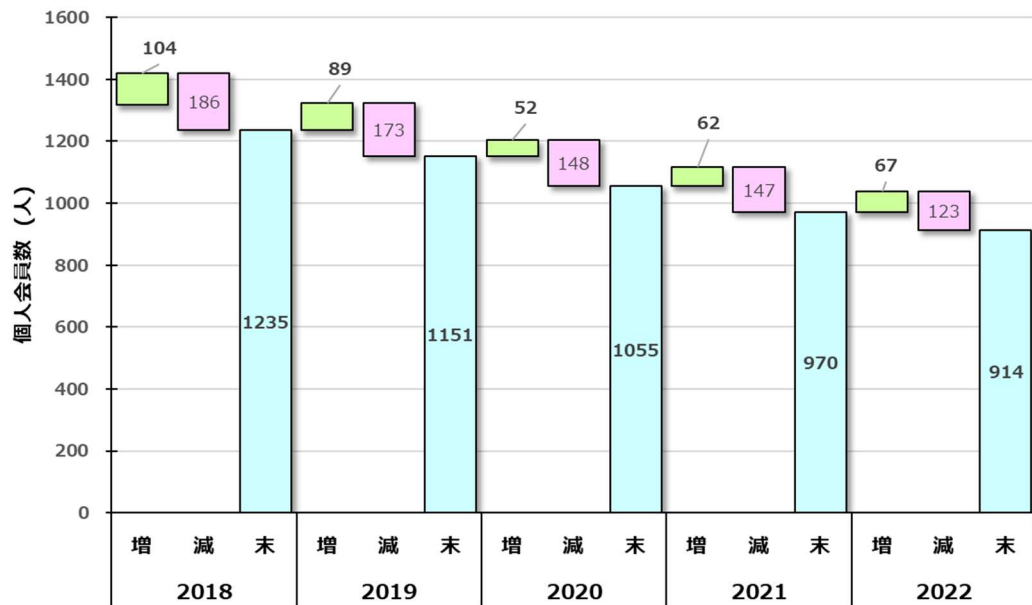
2022 年 3 月 31 日時点で会員状況は次の通りです。

表 2022 年度末 個人会員数

名誉会員	10 名
正会員	881 名
正会員 (海外)	13 名
学生会員	9 名
学生会員 (海外)	1 名
計	914 名

個人会員数は 2022 年 3 月末時点で 914 名となりました。

会員数はリーマンショックの際(2007 年)に減少に転じて以来その傾向が続いています。ただ、2020 年度からはコロナ感染拡大による諸活動の自粛停滞、発表大会の中止や発表数減少の影響もあり、新規の入会者が減少してきたものの、退会者も減ったことで、全体としての減少傾向はやや鈍化してきました。



図および表 2018～21 年度 個人会員数推移

	年度	2018年	2019年	2020年	2021年	2022年
増	入会	104	89	52	62	67
	復会	0	0	0	0	0
	計	104	89	52	62	67
減	休会	1	0	2	0	0
	退会 (逝去)	1	3	1	8	0
	退会 (退会届)	165	155	130	125	100
	退会 (資格喪失)	19	15	15	14	23
	計	186	173	148	147	123
年度末	対前年	-82	-84	-96	-85	-56
	在会	1235	1151	1055	970	914

会員数、即ち皆さんに納めていただく会費は、発表大会を始めとするイベントの参加費収入が減少している現状では、学会総収入の約 50%を占めております。健全で有益な学会活動を実施し続けるために、会員数の減少を抑えることは引き続き学会運営上の大きな課題であります。

役員および代議員の皆様には、品質工学会の魅力を発信し会員数を維持増加させるためにご協力いただけるようお願い致します。

2) 名誉会員

2023 年 3 月 31 日現在の名誉会員は以下の皆様です。(敬称略、五十音順)

伊藤 源嗣	稲生 武	紙本 治男	鴨下 隆志	草間 三郎
小池 昌義	土屋 元彦	谷本 勲	原 和彦	矢野 宏

3) 賛助会員

2022 年度の賛助会員は次の通りです。年度初めに 1 団体が入会され、計 25 団体(28 口)の皆様から学会活動への支援をいただきました。

表 2022 年度 賛助会員

会員番号	会社名	口数	備考
90002	古河電気工業(株)	1	
90007	富士フイルム(株)	1	
90008	富士フイルムビジネスイノベーション(株)	2	
90010	(株) 不二越	1	
90013	マツダ(株)	1	
90015	(株) ツムラ	1	
90016	いすゞ自動車(株)	1	
90025	三菱重工業(株)	1	
90037	コニカミノルタ(株)	1	
90043	(株) 小松製作所	1	
90053	(株) I H I	2	
90059	(一財) 日本規格協会	2	
90065	富士フイルムマニュファクチャリング(株)	1	
90066	デンソーテクノ(株)	1	
90067	(株) 松浦機械製作所	1	
90070	Y K K(株)	1	
90070	(株) ノトロイ	1	
90072	アイコクアルファ(株)	1	
90073	アルプスアルパイン(株)	1	
90077	本田技研工業(株)	1	
90079	K Y B(株)	1	
90080	(国研) 宇宙航空研究開発機構	1	
90081	(一社) 日本品質管理学会	1	
90083	(株) ダイセル	1	
90084	本田技研工業(株) 完成車開発統括部	1	※2022/4/1入会
計	25 団体	28 口	

0.4. 主要な活動

一般社団法人 品質工学会 2022年度 主要活動

		事業		学会運営		
		主要イベント	出版	部会長会議	理事会	その他
2022年度	4		学会誌 ・Vol.30, No.2	・(4/13)		代議員選挙 (4/1～)
	5	▼次世代経営研究会(5/17)		・(5/11)		
	6	★研究発表大会(6/23,24) ■定時社員総会(6/24)		・(6/8)	・(6/8) ・(6/24)	
	7		・Vol.30, No.3	・(7/13)		
	8	▼次世代経営研究会(8/30)		・(8/10)		
	9	●学校交流会 (9/3) ○田口論説と事例に学ぶMTシステムコース(9/30)		・(9/14)	・(9/14)	
	10		・Vol.30, No.4	・(10/12)		
	11	★技術戦略研究発表大会(11/18)・・・ハイブリッド開催 ○解析支援ツール講座「パラメータ設計コース」(11/25)		・(11/9)		
	12			・(12/15)	・(12/15)	
	1	★特別企画シンポジウム(1/20)	・Vol.31, No.1	・(1/11)		
	2	○解析支援ツール講座「MT法コース」(2/24)		・(2/8)		
	3	●学校交流会 (3/4) ▼次世代経営研究会(3/8)		・(3/9)	・(3/9)	
2023年度	4		・Vol.31, No.2	・(4/12)		
	5	▼次世代経営研究会(5/17)		・(5/10)		
	6	★研究発表大会(6/23,24)・・・ハイブリッド開催 ■定時社員総会(6/24)・・・ハイブリッド開催		・(6/14)	・(6/14) ・(6/30)	

0.4.1. 会長直轄組織

★田口の考え方の体系化委員会

Vision30 活動において進められていた「田口の考え方の構造化」を継続完遂するために、田口の論説・著書の調査&整理の研究成果として、田口の考え方の構想（品質工学概論）、技術開発に対する品質工学、品質工学のための SN 比について大会で発表しました。

★特命研究委員会(仮称)の設置

品質工学の数理・学理の探求を目指しておりましたが、残念ながら活動開始に至りませんでした。来年度あらためて設置を企画します。

★横幹連合への再加入

コトづくりコレクションに「品質工学」が選出されたことを受け、あらためて加盟申請し、2023 年 4 月より横幹連合会員団体となりました。今後益々の連携を進めます。

★JAQ(日本クオリティ協議会)への参画

一昨年度より設立準備に参画してきました JAQ が、2023 年 4 月に正式に設立されました。日本品質管理学会、日本科学技術連盟、日本規格協会、日本能率協会および品質工学会の品質関連 5 団体が集まり、昨今のデータ改ざん問題など、日本の品質問題についてオールジャパンで対応する活動を進めていきます。

0.4.2. 運営統括部

従来から運営してきた企業交流会企画委員会、教育・普及委員会、新規事業委員会（商品開発プロセス研究会、ファブシステム研究会）、経営委員会（次世代経営研究会）、編集委員会、広報部会、審査表彰部会の定常活動については、会員に取ってさらに有意義な活動になることに留意して活動してきました。

日本品質管理学会との共同研究会である**商品開発プロセス研究会**は引き続き活発に研究活動をおこなっていました。

品質工学エンジニア認定制度については会員の認知度を高める活動を行い、認定者を計 4 名に増やすことが出来ました。

広報活動の中で、**学会ホームページ（HP）**の活用をさらに充実させてきました。また、HP の更新に伴う運営体制の仕組みを整えています。品質工学会活動および品質工学の研究成果を世界に発信すること、また海外の情報を日本国内で共有化することを意識して国際化対応委員会と協力して英文対応への検討を開始しました。

0.4.3. 組織統括部

研究会活動の情報展開による**全国研究会の相互参加の増加**、学校関係者の積極的な指導による**学校交流会の参加者増加**など、研究会同志のコミュニケーションや学校での研究が活発化して参りました。

加えて昨年作成した企業向けテキストを企業で実際に活用頂くために必要な情報を整理する取り組みを開始すると共に、社会損失を低減する**研究テーマ発掘の取り組み**も開始し、品質工学活用の礎を作りつつ、更に社会貢献を果たすための研究を活発化させる準備を進めております。

0.4.4. 技術統括部

今年度は、大会企画・運営と技術向上の諸活動に加え、品質工学の国際化を進めていくために国際化対応委員会を設置し、活動を進めました。

1. 大会企画・運営

- 第 30 回品質工学研究発表大会（RQES2022S）6 月 23 日、24 日
昨年と同様に、オンラインで、統数研の施設を運営会場として開催しました。
- 第 15 回品質工学技術戦略大会（RQES2022A）11 月 18 日
現地会場である星稜会館と LIVE 配信を併用したハイブリット形式にて開催しました。

2. 技術向上活動（技術向上委員会活動）

品質工学の「**体系化**」、「**新領域適用**」、「**手法研究**」の 3 領域について前年から継続中のテーマについて活動しました。

- 「**体系化**」については、過去の大会発表事例のデータベースの作成を進め、HP で公開しました。
https://rqes.or.jp/archives/library/caseStudyDatabase/RQES_DBase_A_20230130.xlsx
- 「**新領域適用**」については、継続して、商品開発プロセス研究会の WG 活動に委員として参加しま

した。

- 「手法研究」については、下記のテーマについて議論を行い、その成果を学会誌に投稿しました。

- ① RT 法のデータ単位の問題を検討し、単位が混在したデータで解析するときの数理面および実務上の不具合を明確化し、その対処法を論説にまとめて学会誌に投稿しました。
- ② 学会の活性化・会員増加活動としては、TRIZ、QFD 等の手法や AI など新技術との連携について検討しました。

3. (新規) 国際化対応委員会の設置と活動

世界における品質工学の取組み状況を把握して紹介するとともに、日本における取組みについて世界に積極的に情報発信していくことを目的として、国際化対応委員会を設置し、活動を開始しました。

初年度として、①世界における品質工学の活用状況の把握、②次回 ICRQE 主催団体の調整、

③学会 HP 内に国際ページの作成等に取り組みました。

4. (新規) テーマ公募研究会の制度化

会員の研究活動の促進と成果を会員ならびに社会に広く還元していくことを狙いとした研究会制度を検討してきましたが、成案には至りませんでした。具体的には 2023 年度に制定し運用を開始する予定です。

0.4.5. 中長期方針/計画の検討

2022 年度に完了しました Vision30 活動の結果を受け、次の 5 年からさらに将来に向け、会長および 3 副会長を中心に、あらためて品質工学会の「ありたい姿」を打ち出し、品質工学の目的、従来の取組み、取り巻く環境を踏まえて、以下のように課題と方針を絞り込んできました。まだ議論が必要な部分もありますが、まずこれらを基幹として、次年度計画に具体的な活動項目を盛り込んで行きます。

	【ありたい姿】	【これまでの取組み】	【課題】	【方針】
(1)	社会課題への対応 社会の問題・課題をキャッチアップし、それらを解決・達成するための損失低減の方策を開発できている	<ul style="list-style-type: none"> ●社会(ユーザー側)の損失低減に対し <ul style="list-style-type: none"> ・「機能のばらつき」：評価の考え方と方法論を提示し、広く普及 ・「使用コスト」：故障予知の考え方と方法論を提示し、複数の業界で成果 ・「公害」：地球温暖化やプラごみなどの「公害」に対する研究に着手 ●産業(作り手側)の損失低減に対し <ul style="list-style-type: none"> ・新たな価値を生み出す商品開発プロセスおよびマネジメントの研究に着手（商品開発プロセス委員会、次世代経営研究会） ・技術開発にフロントローディングさせる考え方と方法論の普及（田口取り組みの構造化、企業向けテキスト作成、・・・） 	1979 年に出された社会損失低減の考え方による活動を実施し、様々な成果を挙げてきたが、今後 SDG'S など必要とされている幅広い社会損失低減に目を向け取り組むこと	SDG'S など、幅広く社会損失低減に向けた・研究テーマの設定・研究・普及する体制の構築
(2)	品質工学の成果発信と活用促進 広く社会に発信し活用の促進ができている	・研究発表大会、学会誌、図書、Web など、主に会員向けに情報発信・地方研究会と連携し、非会員を含めた情報発信・新聞出版社と連携し、活動の一部を国内に発信・地方研究会と連携し、活用を促進	<ol style="list-style-type: none"> 1. 学会活動の DX 化を進め、情報の発信と活用促進を効果的かつ効率的に進めること 2. 発信・活用すべきこれまでの研究成果を整備すること 	これまでの社会損失低減の考え方と方法論の整理と、効率的な会員・非会員への情報発信と活用促進の拡充
(3)	会員支援 会員各々の目的の実現を支援できている	・研究をサポートするために教育を一部実施 ・サポートできる指導員をアサインし、サポートを実施	会員の目的・期待を把握し、会員の活動をしっかり支援すること	会員の目的・期待の把握と、それに応じたサポート体制の構築

2022 年度 事業報告 (詳細)

2022 年度に実施する活動内容を、定款に定められた「当学会の目的を達成するための 8 つの活動項目」(下記)に沿って記述します。

- 1) 品質工学の研究と調査、および奨励、助成
- 2) 品質工学の普及、およびその奨励、助成
- 3) 品質工学の研究、普及および当法人への多大な貢献に対する表彰
- 4) 学会誌その他の刊行物の発行
- 5) 研究発表大会、研究集会、講演会、展覧会、講習会、見学会などの開催
- 6) 品質工学情報の収集、提供
- 7) 内外関係団体との連絡会および提携
- 8) その他この法人の目的を達成するための必要な事業

1. 品質工学の研究と調査、およびその奨励、助成

1.1. 田口の考え方の収集・整理

… <田口の考え方の構造化研究会>

田口の考え方の研究会は、毎月第一土曜日を定例会議として、以下の 4 つのテーマを設定して研究を行いました。

- 1) 品質工学の概論
- 2) 技術開発に対する品質工学
- 3) 機能のばらつきを測定する SN 比の体系
- 4) 品質工学のための数理

これらの研究成果として、学会の目的でもある評価技術の体系化に対して、体系化の枠組みが少し見えてきましたので、2022 年の品質工学研究発表大会において、テーマ 1)田口の考え方の構想（品質工学概論）、2)技術開発に対する品質工学、3)品質工学のための SN 比について発表し、会長賞が授与されました。また、発表内容は校正の上、一部を学会誌(Vol.30,No.4, Vol.31,No.1,No.2)に投稿しました。残りの内容についても投稿の準備をしています。

さらに、テーマ 3) に関しては、パラメータ設計との関連も深いので、並行して研究を行っています。一部の公認研究会で説明を行い、議論を深めました

1.2. 研究会との連携強化

… <研究会連携委員会>

【公認研究会】

北海道・東北	北海道タグチメソッド研究会、東北品質工学研究会
関東	品質工学フォーラム埼玉、NMS 研究会、神奈川品質工学研究会
甲信越・北陸	山梨県品質工学研究会、北陸品質工学研究会
東海	静岡品質工学研究会、日本規格協会/計測機能研究会(MFRG)、 浜松品質工学研究会、中部品質管理協会/中部品質工学研究会
近畿	滋賀県品質工学研究会、関西品質工学研究会
中国・四国	広島品質工学研究会、香川品質工学研究会
九州	北九州品質工学研究会、佐賀県品質工学研究会
海外	中国品質工学研究会

0) 活動全体

“横通しのコミュニケーションによる地方連携の土台づくり”をテーマに横通しのコミュニケーションを継続して行いました。

1) RQES2022S を活用したコミュニケーション強化

研究会オーガナイズドセッションと、研究会活動展を実施しました。さらに研究会活動展については、開催の是非等を含めて各研究会に対するアンケート調査を行いました。

2) 学会活動の連携実施

学会活動に関して各研究会との意見交換が必要な場合、積極的に研究会に働きかけました。

3) 地方研究会間のコミュニケーション活発化

他の研究会への参加の仕組みは検討中の状況ですが、研究会懇談会を実施し、また合同研究会や品質工学シンポジウム（関西）への各研究会からの参加を促進しました。

4) 学会誌への研究会活動報告掲載の推進

継続して実施しています。

1.3. 品質工学の体系化

… <技術向上委員会>

「体系化」については、事例データベースを作成し HP 上に公開しました。

https://rqes.or.jp/archives/library/caseStudyDatabase/RQES_DBase_A_20230130.xlsx

1.4. 品質工学新領域開拓

… <商品開発プロセス研究会/技術向上委員会>

マイルストーンとして 2022 年度中に各 WG の研究成果を盛り込み新商品開発プロセスの全体をつなげた推奨プロセスモデルをまとめる予定でしたが、各 WG での進捗状況を考慮して、次年度以降に延期しました。・その研究進捗の中間報告としては、品質工学会の研究発表大会に 1 セッションの発表を行い、また日本品質管理学会の学会誌「品質」に研究会の活動報告を投稿しました。2023 年 4 月号（Vol.53-No.2）に掲載される予定です。

●**WG1** は商品開発最上流プロセスとしての新規事業を企画する際のプロセスや落とし穴など、社会的課題抽出の視点を基に進めていきます。Service Dominant Logic、Design Thinking などの顧客との価値共創プロセス（Customer Journey）のデザインに資する分析プロセスを提示しつつ議論してきました。

その中で、モノやその機能ではなく、製品に付随するどのようなサービス（機能）が歴史的に進化し既存製品を淘汰したかの検討も行っています。

●**WG2** はプレゼンを希望する地域研究会への紹介を完了しました。（研究会数:10）技術開発の進め方を変えるためのマネジメントの関与、各技法を活用する人材育成などの課題を抽出することができました。T7 や品質工学を経営課題達成の手段と位置づけるための方針管理によるマネジメントの研究については、Sub-WG2 を結成し、リモート付箋ツールを活用して以下のステップで活動を実施しました。

- 1) 「お客様の期待を超える製品を継続的に提供できている」をトップ事象にして、あるべき状態を抽出
- 2) あるべき状態を系統図にする
- 3) あるべき状態を計測するものさしとしての管理項目を上げる

本年度は 2) を完了し、289 個の“あるべき状態”を定義しました。現在は 3) のあるべき状態を計測する管理項目を定義する活動を継続しております。

●**WG3** は事業評価と意思決定に損失関数を適用している Real Option 理論を参考に、事業評価を経て意思決定すべき対象を整理し、新規市場への参入、モデルチェンジ、研究開発プロジェクトの継続あるいは中止、技術投入の保険、源流（技術開発）/上流（製品設計）でのロバスト性も加味した意思決定評価方法の研究とその支援ツールについて、検討を継続しました。特に損失関数を使った新規機能価値の分析手順の事例研究、製品開発プロセスのマルコフ決定過程に基づいた評価方法の研究を深めています。

1.5. 品質工学手法研究

… <技術向上委員会>

- ① RT 法のデータ単位の問題を検討し、単位が混在したデータで解析するときの数理面および実務上の不具合を明確化し、その対処法を論説にまとめて学会誌に投稿しました。
- ② 学会の活性化・会員増加活動としては、TRIZ、QFD 等の手法や AI など新技術との連携について検討しました。

2. 品質工学の普及、およびその奨励、助成

2.1. 資格制度の制定

… <品質工学エンジニア認定審査委員会>

品質工学エンジニア認定制度については会員の認知度を高める活動を行い、応募者を増やすことができました。また、その後審査委員会にて審査を行った結果、品質工学フェロー2名、品質工学エンジニア2名が認定されました。

2.2. 品質工学教育特別講座の開催

… <教育・普及委員会>

- ・2022年度の講座は、2022年8月に「品質工学特別講座-田口論説に学ぶMTシステムコース」を開催しました。その実施報告を学会誌2023年4月号に掲載する予定です。
- ・講座については、新型コロナのためすべてWeb開催としました。Web形式は場所を限定しないメリットもありますが、教育効果がより高いと思われる対面形式も今後は検討していきます。
- ・Web講座の新規企画は、来年度に繰り延べます。

2.3. 解析支援ツールの提供

… <教育・普及委員会>

2022年11月に「品質工学講座-パラメータ設計の基本とパラメータ設計ツール講座」、2023年2月に「品質工学講座-MTシステムの基本とMT法ツール講座」を開催しました。その実施報告を「品質工学講座-パラメータ設計の基本とパラメータ設計ツール講座」は学会誌2023年4月号に、品質工学講座-MTシステムの基本とMT法ツール講座」は2023年7月号に掲載する予定です。また2022年3月に開催した「品質工学講座-MTシステムの基本とMT法ツール講座」の実施報告は2022年10月号に掲載しました。

- ・非会員向け解析支援ツールのお試し版を2022年11月にリリースしました。
- ・パラメータ設計解析支援ツール及びMT法解析支援ツールの継続的なフォロー実施中です。

2.4. 広報活動の強化

… <広報部会>

- ・引き続きコロナウイルス感染症の影響を受け、学会イベントの数多くがオンラインで実施されていますが、対面および現地開催に戻る場合への準備をスタートさせました。
- ・今後も、Webサイトからの情報発信が中心となるため、できる限り学会Webサイトの充実には力を入れました。
- ・第30回研究発表大会がオンラインで開催されたため、カタログ展示などの現地での広報活動を行うことができませんでしたが、対面での学会開催を見据えたカタログ展示の運営方法について検討しました。
- ・学会誌への広告掲載数の維持や、HPでの広告掲載などについて総務部会と協議を進めました。
- ・第30回品質工学研究発表大会の前後に2回、日刊工業新聞紙面で開催告知と結果報告を掲載しました。また、学会Webサイトに大会の情報を掲載し周知と参加者拡大を促しました。
- ・第15回品質工学技術戦略研究発表大会の宣伝告知を実施、参加者の確保に務めました。
- ・Webサイトを通して提供する会員サービスの拡充を図るべく、総務部会、事業部会と連携して内容構成の

整理と拡充を行いました。

- ・Web サイトへの掲載フローを提示し、各部会からの掲載依頼に対して迅速に対応できるようにしました。
- ・情報発信の正確性と迅速性を高めるために、Web サイト編集ソフトのライセンス数を増加させました。
- ・Web サイトのページビュー数、訪問者数を漸増させました。
- ・Web サイトを S S L 化しました。

2.5. 品質工学の国際化

…… <国際化対応委員会>

世界における品質工学の取組み状況を把握して紹介するとともに、日本における取組みについて世界に積極的に情報発信していくことを目的として、国際化対応委員会を設置し、活動を開始しました。

- 本格的な活動開始を視野に入れ活動メンバーを募集し、田口伸委員長、舟山幹事、委員として浜田、衛藤、細川、宮城の 6 名が集まりました。
- 世界における品質工学の取組み状況を把握するためにメンバー間の情報交換を実施しました。世界では品質工学を仕組みの中で使用している例が多数発表されており、その中で、品質工学の在り方も様々に改定されていることが分かりました。
- 次回 ICRQE の主催を担当いただける団体を探し、マレーシア工科大学に名乗りを上げていただきました。2024 年 Web にて開催予定です。
- 学会 HP 内に国際ページ（英語）を作成し、海外への情報発信の場とすることを計画し、広報部会と共に着手しました。従来の日本語版ページの情報と相違が無いようにするとともに、海外へ正しい品質工学を伝える場とすべく内容に配慮しながら進める仕組みを広報部会と協議し合意しました。

3. 品質工学の研究、普及および当法人への多大な貢献に対する表彰

3.1. 論文に対する表彰

… <審査表彰部会>

3.1.1. 精密測定技術振興財団 品質工学賞 論文賞

表彰審査委員 24 名からなる論文賞表彰審査委員会を設置し、2021 年および 2022 年の品質工学誌に掲載された研究論文（計 18 編）を対象に事前審査および本審査会にて審議を行い、下記論文を選定しました。なお、論文賞については表彰審査基準の見直しを行いました。

金賞：熱式質量流量センサの開発・生産プロセスに対する品質工学の適用 Vol.30 No.3

岡野浩之（堀場エステック(株) 正会員）

銀賞：金型補修のための肉盛溶接のバーチャル設計と機能性評価 Vol.30 No.1

寶山靖浩（リョービ(株) 正会員）

銀賞：ナノ秒パルス放電プラズマオゾナイザにおけるオゾン生成濃度の最大化 Vol.29 No.3

小笠原明彦^{*1、4}、岩崎明暉^{*2}、市来竜也^{*2}、坂本琢馬^{*2}、王 斗艶^{*3}、浪平隆男^{*3}、河田直樹^{*4}、福島祥夫^{*4}

（*1 熊本大学産業ナノマテリアル研究所 正会員、*2 熊本大学大学院、*3 熊本大学産業ナノマテリアル研究所、*4 埼玉工業大学先端科学研究所正会員）

3.1.2. 品質工学会 ASI 賞

※2022 年度は授賞論文なし。

3.2. 品質工学会 日本規格協会 理事長賞

… <審査表彰部会>

品質工学会審査部会で遠隔会議による事前審査の結果、上申し、日本規格協会 朝日理事長御出席の本審査委員会において下記 2 名に授与すると結論に至りました。なお、2022 年度は応募促進を図り、昨年度よりも応募者数を増やすことができました。

角 有司 氏 会員 No. 16742 所属：宇宙航空研究開発機構 安全・信頼性推進部

応募者：吉澤 正孝氏 推薦者：吉澤 正孝氏

宇宙航空研究開発機構(JAXA)に所属し、新しい宇宙航空ミッションに向けてプロジェクトを担当する傍ら、宇宙航空における基本的な条件である高安全、高信頼性を担保する品質工学の実践と普及に精力的に取り組んでいる。品質工学会での活動は 5 年余りと短い、その中で数多くの事例、案件に参画し、発表、論文化を行っており、その実績より。

金本 良重 氏 会員 No. 11044 所属：個人

応募者：横山 竜大氏 推薦者：嘉指 伸一氏

論文賞金賞、貢献賞金賞 の受賞や品質工学会への多数の論文投稿の実績に加え、品質工学フォーラム埼玉の創立メンバー、田口玄一博士創設の品質工学研究会（日本規格協会主催）の幹事長として、

各研究会員間での品質工学に関する知見の共有・研究の推進、研究結果発表の企画等を通して品質工学の普及に大きく貢献したことより。

3.3. 学生賞

… <審査表彰部会>

2022 年 12 月 1 日～2023 年 1 月 27 日にかけて 2023 年学生賞の募集を行い、全 4 件の応募を得ました。学生賞表彰審査会にて、審査委員による予備審査および 2 月 20 日に本審査会を開催し、下記 3 件の研究を品質工学会学生賞として選定しました。なお、2022 年度は応募促進を図り、昨年度よりも応募者数を増やすことができました。

授賞研究

題目： ①金型稼働状態監視および可視化に関する教育システムの検討
②IoT による品質管理に向けた金型の状態監視および可視化システムの検討
③金型変形挙動可視化への MT 法の適用
④MT システムを用いた射出成形における糸引き異常検知手法"

受賞者： 金城 寿（埼玉工業大学大学院 博士前期課程 2 年）

指導教員： 福島 祥夫（埼玉工業大学大学院 教授）

題目： 動揺測定データリンク型列車防護用台車モニタリングシステムの研究

受賞者： 池田 圭佑（埼玉工業大学大学院 修士 2 年）

指導教員： 河田 直樹（埼玉工業大学大学院 教授）

題目： 筋電義手ハンドコントローラの RT 法による安定動作のパラメータ推定

受賞者： 内藤 賢宏（東京電機大学大学院 理工学研究科 修士 2 年）

指導教員： 大西 健吾（東京電機大学 理工学研究科 教授）

3.4. 発表に対する表彰

… <審査表彰部会>

3.4.1. 精密測定技術振興財団 品質工学賞 発表賞

・第 30 回品質工学研究発表大会にて、以上の各賞を選定し、授賞を行いました。

金賞 ニオイセンサを用いた MT 法によるマスクメロンの熟成モニタリング（発表 No.31）

小黒 諒*1、越水重臣*1、小杉俊介*2、鈴木健志*2

（*1 産業技術大学院大学 正会員、*2 I-PEX(株)）

銀賞 機能窓法によるロータリ切削工具の機上回転放電成形条件の最適化（発表 No.18）

杉本里駆*1、二ノ宮進一*1、山田庸二*2、岩井 学*3

（*1 日本工業大学 正会員、*2 日本工業大学、*3 富山県立大学）

銀賞 エンジン外回り部品の開発工程改善 -応力ロバストアイテムの開発-（発表 No.45）

高倉裕太郎*1、箱本健次郎*2、城 一樹*2、衛藤洋仁*1

（*1 いすゞ自動車(株) 正会員、*2 いすゞ自動車(株)）

銀賞 金型製作検討におけるエキスパートの思考の予測手法開発（発表 No.36）

有松直弥*1、白川真也*1、川口元志*1、久保祐貴*2

(*1 マツダ(株) 正会員、 *2 マツダ(株))

なお、大会発表賞の表彰審査基準については見直しの必要性も含め引き続き検討します。

3.4.2. 品質工学研究発表大会 会長賞

題 目 企画セッション「みえてきた！田口の思考と型」の皆様（発表 No.13、14、15、16）

受賞者 吉澤正孝*1、衛藤洋仁*2、安藤 カ*3、吉村孝史*4、武重伸秀*4、上杉一夫*5、吉原 均*6

(*1 クオリティ・ディープ・スマーツ有限事業責任組合 正会員、 *2 いすゞ自動車(株) 正会員、 *3 富士フイルムビジネスイノベーション(株) 正会員、 *4 マツダ(株) 正会員、 *5 上杉技研 正会員、 *6 キヤノン(株) 正会員)

3.4.3. 品質工学研究発表大会 実行委員長賞

題 目 中部品質工学会のの皆様（発表 No.32、39、40、41、42）

受賞者 出島和宏*1、牧野和昭*1、福田翔太*2、山中貴光*3、池田圭一*4

(*1 中部品質工学会 正会員、 *2 (株)ダイセル、 *3 ローム(株)、 *4 (株)ダイセル 正会員)

3.5. 田口賞

… <審査表彰部会>

- ・田口賞の候補者選定に運営/組織/技術の3統括部長が加わる形に体制拡大の検討を進めました。引き続き具体的な体制構築に取り組みます。
- ・田口賞自己審査ツールの提供について検討を開始しました。

3.6. 貢献賞

… <総務部会>

品質工学会の活動に貢献・協力した会員に授与される賞です。別途に定義された貢献賞得点を累積加算し、その得点が100点に達した会員に貢献賞(入賞)を、さらに100点ごとに銅賞(200点)、銀賞(300点)、金賞(400点)を授与します。

2022年度のポイントにより、新たに受賞されたみなさんは以下であります。(得点順、敬称略)

金賞: 平井 智紀、佐々木 賢、鷺谷 武明 …(3名)

銀賞: 河田 直樹、寶山 靖浩、伊勢 大成、越山 卓、白木 信 …(5名)

銅賞: 椿 広計、岸 知男、山野 竹秀、船戸 吉幸、稲垣 雄史、向出 保仁、水野 健一郎 …(7名)

入賞: 渡辺 誠、藤本 武文、合田 要祐、玉木 淳、小平 努、滝田 祐一、深堀 貢、

竹花 末起一、森 智英、塩入 一希、菊地 教行 …(11名)

3.7. 表彰体系および基準の見直し

… <審査表彰部会>・

品質工学会の表彰体系の整理、大会発表賞の表彰審査基準の見直しについて継続的に検討しました。

4. 学会誌その他の刊行物の発行

4.1. 学会誌「品質工学」の発行、編集改善と投稿数の増加施策

… <出版部会/編集委員会>

Vol.30, No.2 (2022 年 4 月号)

…視点	多様性と品質工学	編集委員会
解説	2021 年研究論文振り返り バーチャルパラメータ設計の可能性と課題 IT 化の進展と「品質工学」誌のこれから（その 2）	審査表彰部会 + 出版部会編集委員会 技術向上委員会 出版部会編集委員会
事例研究	MT システムのパターン認識への適用	矢野耕也 + 高橋和仁
実施報告	技術開発プロセスを設計するプラットフォーム T7 の提案と検証	細川哲夫
QE スクエア	項目によりデータの単位が異なる場合の RT 法	中島建夫

Vol.30, No.3 (2022 年 7 月号)

…視点	「伝える」ことの重要性	編集委員会
解説	シミュレーションによるロバスト設計（2）— V & V の必要性和方法— + 山戸田武史 + 浜田和孝 + 太田勝之 + 細川哲夫 + 芝野広志 + 沢田龍作 + 坂本雅基 + 高橋和仁 + 田口 伸 + 常田 聡 + 中島建夫 + 細井光夫 + 見原文雄 + 矢野耕也 下流再現性について—品質工学の誤解を解くカギ—	角 有司 武部 智
事例研究	国民性とイノベーションとの関係からうかがえるこれからの“戦略” 熱式質量流量センサの開発・生産プロセスに対する品質工学の適用 MT 法におけるロバスト性のある単位空間の作成	藤本武文 岡野浩之 森 芳和 + 飯塚富郎 + 矢野耕也
QE スクエア	QE スクエアに期待する一査読を超えて	中島建夫

Vol.30, No.4 (2022 年 10 月号)

…視点	学会 30 周年を迎えるにあたって	編集委員会
特集	学会設立 30 周年に寄せて	総務部会 + 編集委員会
祝辞	学会設立 30 周年祝辞	
論説	社会課題に応える品質工学の役割 品質工学会「ビジョン 30 に向けた活動報告」（1）—ビジョン 35 を構想するためのビジョン 30 長期計画の活動の総括と今後の課題—	椿 広計 吉澤正孝
解説	回顧企画 品質工学会 10 周年記念品質工学大討論会 来賓祝辞 回顧企画 品質工学会 10 周年記念品質工学大討論会 日本を救う技術課題の解決 田口玄一（編集：矢野耕也，田口 伸） 田口玄一のインド統計研究所における成果 —酸化被膜の実験と累積法— 北陸品質工学研究会座談会 北陸品質工学研究会の振り返りとこれから —品質工学会とともに歩んだ 30 年— 編集委員会座談会 品質工学の継承と普及（1） 実施報告簡易モデルを用いた自動車走行における安全のものさし作成	田口 伸 矢野耕也 北陸品質工学研究会 編集委員会 竹内 和雄
QE スクエア	実験計画法を応用した機械学習モデルのロバスト性向上手法	井出 勝 + 中澤克仁

Vol.31, No.1 (2023 年 1 月号)

・視点	「持続可能な技術・技能の伝承」について	編集委員会
論説	品質工学会「ビジョン 30 に向けた活動報告」(2) —ビジョン 35 を構想するためのビジョン 30 長期計画の活動の総括と今後の課題—	吉澤正孝
解説	第 30 回品質工学研究発表大会の振り返り	明吉秀樹 + 安藤 力 + 糸久正人 + 田村希志臣 + 浜田和孝 + 見原文雄
	編集委員会座談会 品質工学の継承と普及 (2)	編集委員会
	実施報告パラメータ成立範囲によるロバスト設計法と耐震設計への適用	角 有司 + 中川貴文
	生体情報に基づく製品の使い心地評価 — MT 法によるコンピュータマウスの操作感の比較 —	植 英規 + 渡邊紫音
QE スクエア	特別講座 (論説に学ぶ MT システム) の気づき — デジタルの標準 SN 比, 多水準の表現方法 —	細井光夫

- ・ 原著論文については 9 報で、目標とした各号 3 報平均ですと 12 報となり、2022 年は未達でした。
- ・ 投稿規程は、執筆細則と共に 1 月号に掲載をし、英文については 3 月に WEB で公開予定です。
- ・ 査読用紙の改定も行いました。
- ・ QE スクエアについては、年間で 8 報掲載しました。
- ・ インタビューの実施は難しかったですが、過去の講演を 2 点ほど記事化しました。
- ・ 文字起こしを有効に利用できました。
- ・ 総ページ数 112 ページを念頭に入れているため、論説 2、解説 14 の掲載を行いました、30 周年記念号が出たために通常より多く掲載したと考えます。
- ・ 春の大会の優秀発表者への呼びかけは継続しております。
- ・ 毎号最大 112 ページ(16 の倍数)で、年間 448 ページを最大に考えました。ただし第 4 号は別枠予算で 30 周年記念号が出ましたので、イレギュラーです。
- ・ 30 周年記念号については、総ページ数 176 ページで発行しました。
- ・ 新規 2 名の編集委員の追加を行いました。
- ・ オンラインでの対談記事の解説が解説 12 報のうち 10 報を占めています。

4.2. 同誌掲載論文のレビュー

..... <審査表彰部会>

第 30 回品質工学研究発表大会の研究発表レビュー記事は 2023 年 1 月号、2022 年学会誌掲載論文のレビュー記事は 2023 年 4 月および 7 月号に掲載となりました。

・これまでの論文賞授賞論文および発表賞授賞研究を再評価し、レビュー集にまとめるにあたり、レビュー集の基本構成および評価の視点、提供方法について検討開始しました。

5. 研究発表大会、研究集会等の開催

5.1. 品質工学研究発表大会

… <発表大会実行委員会>

第 30 回大会（RQES2022S）を、2022 年 6 月 23 日、24 日に開催しました。

- 実行委員特別企画として、「特別講演」および「品質工学会 30 周年記念講演」を実施しました。講演に関連して肯定的な意見を多くいただきました。Vision30 以降の品質工学会の活動への期待がうかがえます。
- 発表件数：個人・団体・研究会などから 57 件
- 参加者： 国内産業界の研究者・技術開発者を中心に 312 名
- 統計数理研究所を運営会場として、完全オンラインでの開催
 - ・ 昨年に引き続いてのリモート開催でしたが、統計数理研究所の協力もあり、大きな問題無く配信することができました。
 - ・ 昨年に引き続き、オンラインで開催することはポジティブな意見をいただきましたが、同時に実地開催再開への希望も多くいただきました。
 - ・ 統計数理研究所への実施報告を行いました。

5.2. 品質工学技術戦略発表大会

… <技術戦略大会実行委員会>

第 15 回品質工学技術戦略研究発表大会（RQES2022A）を 2022 年 11 月 18 日に、星陵會館ホール（千代田区永田町）で開催しました。

- コロナ禍以後の最初の実会場開催で、感染対策什器やリモート設備の投入で運営上困難な面がありましたが、ハイブリッド開催を行ったこと、さらに通信不良対策と参加者へのサービス性向上のため、大会後にオンデマンド配信を行ったことで、ほぼ全ての参加者から良かったとの評価をいただきました。
- 予稿集の pdf 化と事前配布を行い、収支の改善に加え、参加者の利便性向上、理解度アップに繋げる施策となりました。
- 今大会の参加者数は例年並みの 116 名でした。参加者の約 70%がリモート参加で、アンケートでも今後もオンデマンドを含めリモート参加を希望する方が約 70%あったことから、今後の大会もハイブリッド開催を前提に検討を進めていくことにしています。

5.3. 企業交流会 ⇒ 特別企画シンポジウム

… <企業交流会企画委員会>

企業交流会開催のホスト企業が現れない状況の中で、品質工学の新たな方向性を示すことを目的に、TRIZ 協会と共同で特別企画シンポジウムを開催しました。本シンポジウムの狙いは TRIZ、QFD、品質工学の各技法を融合する仕組みを示し、その効果を事例で示すことです。これまでの品質工学会のイベントとは異なる初めての試みでしたが、119 名と予想を大きく上回る参加者となりました。本シンポジウムを通じて技法融合への関心の高さを確認することができました。技法融合の仕組みの構築を品質工学の新たな方向性の一つに加えることで、品質工学への期待を高めることに貢献できたと考えております。

5.4. 次世代経営研究会

… <経営委員会>

次世代経営研究会は定例会を 2022 年 5 月、8 月、2023 年 3 月（7 回、8 回、9 回）に開催しました。基調講演とパネルディスカッションを基本の構成としてオンラインで開催いたしました。また、日本企業の経営課題とその対応について継続的に議論していく WG を 2022 年 5 月より発足し、活動を開始しました。WG 活動は Web を活用し、2022 年 5 月、8 月、12 月、2023 年 2 月の計 4 回開催しました。

5.5. 学校交流会

… <学校教育委員会>

昨年度同様、第 4 回学校交流会を 2022 年 9 月 4 日（土）に、第 5 回を 2023 年 3 月 4 日（土）にいずれもリモートにて開催しました。第 4 回は、学会役員や地方研究会に参加されている企業教育に関わる方々を含む 21 名が参加されました。学生賞受賞者の講演や、学校関係者による座談会も設け、より一層の内容充実化を図りました。第 5 回は年度末にも関わらず、地方研究会に参加されている企業教育に関わる方々を含む 21 名の参加がありました。実社会で活躍されている会員を講師としてお招きし、編集動画を交えた講演と EXCEL を使ったパラメータ設計演習を実施いただき、これまでにない特色を持たせることができました。また、それぞれの交流会の模様を学会誌にて報告しました（第 5 回は次年度報告予定）。

6. 品質工学情報の収集、提供

6.1. 論文電子公開(J-Stage)

… <総務部会>

品質工学の普及宣伝また研究や応用のための先行事例参照の利便性を図るため、学会誌掲載後 1 年を経過した研究論文、論説、解説等の電子公開を継続しています。ただし、従来、公開作業が滞っておりましたが、2022 年度は 29 巻 1 号に掲載の論文まで公開しました。

6.2. 事例データベースの作成・公開

… <技術向上委員会>

品質工学研究発表大会の第 1 回(1993 年)から第 30 回(2023 年)の 31 年間に発表された事例を分類整理したデータベースを作成し、そのエクセル版を学会ホームページで一般に公開しました。

https://rqes.or.jp/archives/library/caseStudyDatabase/RQES_DBase_A_20230130.xlsx

さらに、品質工学会会員向けには詳細な内容や分類を追加したデータベースを公開予定です。

6.3. 品質工学関連図書および文献の収集…田口玄一博士の著書を主に

… <総務部会>

品質工学および関連の貴重な文献の散逸を防ぎ、会員の調査研究の用に供するため、文献資料収集事業を継続します。主に田口玄一博士の著作の寄贈を募り、学会事務所に「水道橋文庫」として収蔵と閲覧の便を図ります。

関連書籍・文献をご寄贈いただける方は、事務局までご連絡ください。

7. 内外の関係団体との連絡および提携

7.1. 日本規格協会

引き続き、「品質工学会日本規格協会理事長賞」のスポンサーシップいただくと共に、品質工学の研究・活用と教育・出版で連携を進めてきました。

7.2. 日本品質管理学会

継続して相互に賛助会員として活動に協力すると共に、共同研究としての商品開発プロセス研究会の活動を継続実施し、その研究進捗の中間報告として、2022 年 6 月の品質工学研究発表大会に 1 セッションの発表を行い、また日本品質管理学会の学会誌「品質」に研究会の活動報告を投稿しました。(2023 年 44 月号/Vol.53-No.2 掲載予定)

7.3. 日本科学技術連盟

本年度より理事を派遣いただき、理事会に参画いただき、連携の検討を進めてきました。

7.4. 産業技術総合研究所との技術交流

技術交流を促進のため、次世代経営研究会の活動として、一般社団法人ミニマルファブ推進機構のファブシステム研究会の年 2 回（2022 年 4 月、11 月）の総会に参加しました。2022 年度は具体的な相談案件はありませんでしたが、引き続き交流していきます。

7.5. JAXA

JAXA ではロバスト設計の標準書の制定後、多次元特性のロバスト設計の標準の検討を一昨年からは行っており、それに対して支援行ってきました。2023 年度も継続していきます。

7.6. 農林水産省

2022 年 5 月 31 日に農研機構副理事長はじめ、幹部との面談を行い、農業分野における品質工学の活用について意見交換しました。面談で興味を示していただいた MT システムについて、別途説明資料を提供しましたが、協業に係るテーマを見出すことはできませんでした。

7.7. JAQ 設立準備委員会

日本品質管理学会、日本科学技術連盟、日本規格協会、日本能率協会および品質工学会の品質関連 5 団体が集まり、昨今のデータ改ざん問題など、日本の品質問題についてオールジャパンで対応する組織の設立準備活動を実行し、2023 年 4 月 1 日、正式に設立し活動を開始しました。

7.8. 横幹連合

品質工学の普及宣伝また他分野での活用を勧めるため、品質工学会として再加盟の申請をし、2023 年 4 月 28 日に開催の横幹連合理事会にて加盟が承認されました。

さっそく雑誌「横幹」10 月号に掲載するとして「学会紹介」の執筆依頼（締め切り 7 月）がありました。

8. その他、この法人の目的を達成するために必要な事業

… <総務部会>

8.1. 会議体運営

総会: 研究発表大会の開催に合せ、第 2 日目の 6/24(金)に開催しました。

理事会: 定例の年 4 回(6、9、12、3 月)の開催の他、総会での役員改選に伴う代表理事選任および研究発表大会での発表賞授与決議のため 臨時に開催しました。

※ 2022 年 6/8(水), 6/24(金), 9/14(水), 12/15(木), 2023 年 3/9(木)

部会長会議: 毎月 1 回、下記の計 12 回定例通りに開催しました。

※ 2022 年 4/13(水), 5/11(水), 6/8(水), 7/13(水), 8/10(水), 9/14(水),
10/12(水), 11/9(水), 12/15(木), 2023 年 1/11(水), 2/8(水), 3/9(木)

8.2. 予算管理(全般、会費徴収管理など)

2022 年度は、3 年目となったコロナの影響も含めて引き続き会員数やイベント参加者数の減少による減収に対応して支出を抑制しつつ管理してきましたが、イベントのリモート開催による会場費等の節約と、コロナによる事業復活支援金(100 万円)をいただけたことにより、事業活動収支で約 60 万円の黒字に漕ぎつきました。

また、2023 年秋から導入されるインボイス制度に関しては、担当税理士と相談の結果、当会は免税事業者であるため登録事業者にはならない(適格請求書発行事業登録は行わない)ことが適当と判断し、当面は登録しないこととしました。

8.3. 規程整備

2022 年度は、定款運用細則(2022/9/14)を改定し、品質工学相談員規程(2023/3/9)および電子出版物頒布・配付要領(2022/10/12)を新たに制定しました。

8.4. バックナンバー頒布方法の改定

従来、学会誌、大会予稿集等のバックナンバー(在庫資産)を有料頒布してきましたが、冊子の在庫切れなどに対応して PDF 化を含めた頒布方法の改定を行い、学会ホームページ上で公開しました。

8.5. 会員管理システムおよび事務局の労務形態の変更

2022 年度中に検討した結果、将来に向け、業務遂行の持続性と経費低減を図るために事務局の労務形態と会員管理システムとを変更することとしました。

2022 年度は準備期間、そして 2023 年度を移行期間として、事務局業務を業務委託化し、新システムの当学会向けカスタマイズ、会員データベースの移行、大会参加申込み機能から順次適用し、2024 年度から定常的な事務局の業務形態として運用させる計画です。

従来、会員管理・大会等の参加者管理・学会誌発行事務を始めとする事務局業務は、J-Alive 制作&メンテの「会員管理システム」と、ニコン日総プライム社からの派遣社員の「事務局員」とで担ってもらってきました。

しかしながら、システムの老朽化(機能追加や OS バージョンアップなどへの対応工数の増大、担当の後任者不在)と、派遣社員としての雇用条件の不安定などの問題から将来的に安定的な事務局業務の遂行に対しての不安が顕著になってきました。

そこで、J-Alive より、システム変更提案を受けたのを機に、同社と事務局および総務とで検討した結果、①市販の会員管理システムへの移行、②それによるシステムメンテおよび事務局作業の工数低減、③事務局業務の委託化の 3 点を骨子とする移行計画案を立て、正式見積りの結果、定常移行後には、現行総額より約 10%の経費低減が見込めることから、本移行計画に着手しました。完了は 2023 年末の予定です。